

巻 頭 言

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

附属中等教育研究センター

センター長 大 谷 尚

中等教育研究センター紀要第14・15合併号をお届け致します。本号では、個別論文1本の他、特集として、昨年2月28日に行われた本研究科の「教師教育学領域開設記念シンポジウム『教師教育における研究大学の役割と課題』」の記録を収録しています。これは、この課題に関心を持つ方にとって、大変読み応えのある内容となっていると考えています。

ところで、今年1月16日に文部科学大臣決定として、「高大接続改革実行プラン」が発表されました。そこでは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を三要素とする新たな学力形成への転換と、それを評価する大学のアドミッションへの転換の方向性が示されるとともに、2019年度からの「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と2020年度からの「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の実施が宣言され、学習指導要領も見直すこととされました。

いうまでもなく、これによって、日本の中等教育は、今後その方向性を大きく変えていくことになると考えられます。

そのような中、本センターも、概算要求が認められたことによって、2015年4月から、「高大接続研究センター」へと改組することになりました。したがってこの紀要も、「高大接続研究センター紀要」に名称変更することになり、「中等教育研究センター紀要」としては、本合併号が最後になります。

高大接続研究センターでは、専任教員等の採用を行い、現在の業務を拡張し、研究員等の制度を発展させて、より広範で高度な研究と業務を行っていくこととなります。そこでは、中等教育と高大接続に関するさまざまな課題が、研究科と附属学校の教員だけでなく、大学内外の多様な人々の参加によって、追究されていくことになるはずで、そのため、紀要もいっそう充実したものになることが期待できます。また、今後、この紀要の編集は、主にセンター教職員の手で行われることになると思います。

どうぞ来年度からも、私どものセンターへのご指導、ご協力を下さいますようお願い申し上げます。